

■はじめに

校 園長 の 皆 さ ん、 こ ん に ち は。

「年々歳々 花相似たり、歳々年々 人同じからず」
毎年、この時期を迎えると、この言葉が思い浮かびます。

今年も多く の 先生 方 の 異 動 が あ り ま し た。 今、 こ こ に
いらっしやる先生方と一緒にがんばっていきたいと思
います。



■新規採用者への訓示から

今年 は 小 学 校 43 人、 中 学 校 24 人、 幼 稚 園 9 人 の 合 計 76 人 の 新 規 採 用 者 が 奈 良 市 立 学 校 園 に 着
任 しま し た。 4 月 1 日 の 着 任 式 で は、 新 規 採 用 者 に 2 つ の こ と を 話 し ま し た。

1 つ 目 は 「教 育 は 人 が す る も の」 に つ い て で す。 今 年 度 の 重 点 施 策 の 一 つ と し て、 ICT を 活 用
し た 教 育 の 推 進 を 図 り ま す。 し か し、 ICT を 活 用 し た 教 育 が ど れ ほど 進 ん で い こ う と、 最 終 的 に
は 子 ど も と 先 生 が 向 か い 合 っ た 人 間 関 係 の 中 で 学 ぶ と い う こ と で す。

私 も 教 員 に な っ た の は、 そ の き っ か け と な る 恩 師 と の 出 会 い が あ っ た か ら で す。 初 等、 中 等 教
育 期 の 感 受 性 豊 かな と き に 出 会 っ た 先 生 に 憧 れ、 教 員 に な ろ う と 思 っ た 人 も た く さ ん い る と 思 い
ま す。 し か し、 憧 れ だ け で 教 員 を す る こ と は で き ま せ ん。 ま た、 た だ 単 に 教 科 を 教 え る だ け で は
職 責 を 全 う す る こ と は で き ま せ ん。 教 員 は、 子 ど も の も の の 見 方 や 考 え 方、 そ の 後 の 人 生 を 大 き
く 左 右 し て い く 仕 事 で あ る と い う こ と を 肝 に 銘 じ な け れ ば な ら ぬ こ と を 話 し ま し た。 い か に 社
会 が 変 わ ろ う と も、 最 終 的 に は 「教 育 は 人 が す る も の」 な の で す。

ま た、 教 員 と し て の 最 初 の 時 期 は、 大 変 重 要 な 時 期 で も あ り ま す。 何 十 年 か 経 っ た 後 も、 教 員
と し て ス タ ー ト し た 学 校、 そ の 当 時 に お ら れ た 校 長 先 生 や 先 輩 の 先 生 を 忘 れ ら れ ぬ も の で す。
そ の 当 時 に、 教 え て も ら っ た り 叩 き 込 ま れ た り し た こ と は、 教 員 と し て の 軸 と な り、 判 断 す る 指
標 と な る の で す。 で す か ら、 校 園 長 先 生 は、 教 え る べ き こ と は し っ か り と 教 え、 ま た、 優 し く 導
い て い た だ き た い と 思 い ま す。

2 つ 目 は、 「教 育 は、 学 校 の 中 だ け で、 完 結 す る も の で は な い」 と い う こ と で す。 社 会 人 と し て
多 様 な 経 験 を さ れ た 後、 教 員 と な ら れ た 先 生 も お ら れ る 一 方、 小 学 校、 中 学 校、 高 等 学 校 を 経 て
大 学 に 進 み そ の ま ま 教 員 と な ら れ た 多 く の 人 は、 生 涯、 学 校 文 化 の 中 で 生 活 し て い く こ と に な り、
様 々 な 社 会 と の 接 点 は、 自 分 か ら 関 わ っ て い か な け れ ば、 そ の 機 会 は ほ と ん ど な く な っ て し ま い
ま す。 多 様 に 変 化 す る 現 代、 世 の 中 の こ と を 知 ら ぬ で は 通 用 し ぬ。 そ の た め に も、 地 域 の 人
と し っ か り と 関 わ り を も っ て 視 野 を 広 げ て ほ し い と い う こ と を 話 し ま し た。



先 日、 経 済 同 友 会 ベ ン チ ャ ー 企 業 委 員 会 委 員 長 を し て お ら
れ る グ ロー ビ ズ 経 営 大 学 院 学 長 の 堀 義 人 氏 を 講 師 に 迎 え、 中
学 生 対 象 の キ ャ リ ア 教 育 講 演 会 が 開 催 さ れ ま し た。 各 中 学 校
か ら 集 ま っ た 約 100 人 に 「自 分 ら し く 生 きて いく」 を テ ー マ に ご
講 演 い た だ い た 際、 「ベ ン チ ャ ー 企 業 は 常 識 を 打 ち 破 っ て い
く 企 業 で あ る。 し か し、 常 識 を 知 ら ぬ の で は な く、 常 識 や
規 則 を 知 っ た 上 で そ れ ら に つ い て 考 え、 そ れ ら を 打 ち 破 っ て
い く の で す。」 と、 話 さ れ ま し た。 つ ま り、 革 新 的 な ベ ン チ
ャ ー 企 業 で あ っ て も、 ベ ー ス に あ る の は 常 識 だ と い う こ と で す。

今、 教 育 行 政 は 大 き く 変 わ ろ う と し て い る こ と を 踏 ま え て、 若 い 先 生 方 に、 こ れ ら の こ と を 丁
寧 に 伝 え て く だ さ い。 ま た、 各 学 校 に お い て も 地 域 の 方 と の 関 係 を 築 き、 子 ど も た ち の 教 育 を 支
え て も ら う こ と が 大 事 だ と 思 い ま す。

■修二会（お水取り）から



写真：奈良市観光協会

今年度最初の校園長会では、世界遺産学習に関わる話題を紹介します。

先月、3月12日の深夜、一般的に「お水取り」と呼んでいる「お水取りの行法」を見学しました。深夜2時過ぎに、咒師(しゅし)^{※1}の東大寺の上司永照氏を先頭に5人の練行衆が、閼伽井屋(あかいや)において水を汲む行法が行われました。周りのすべての明かりが消され、松明の明かりを先頭にかがり火と奏楽の中、厳かに1263回目となるお水取りが執り行われました。「不退の行法」として、一度も絶えることなく連綿と今日に至るまで引き継が

れて来るのには、幾度となく見舞われた大きな危機を、その都度乗り越え伝わってきていることを、改めて、深く考える機会となりました。そして、「本物」がもつ、奥行きの高さにも、感動いたしました。

最初の大きな危機は、1180年、治承4年12月28日の平重衡の南都進攻でした。東大寺や興福寺の伽藍の多くが焼失し、二月堂や法華堂の類焼は逃れたものの、仏事も断絶、寺領・荘園も没収、まさに寺院そのものが存亡の危機に陥りました。この時、東大寺は約一か月後の修二会を見合わせる意向を示します。しかし、「四百年余歳に及ぶ行法の趣、断絶すべからず」と若い僧侶らの強い意志と実行力が途絶えることを許さず、行法が執り行われたのです。

最近では戦争が大きな危機を孕みました。戦時中の昭和19年頃、大仏殿を迷彩するために偽装網がかけられ、翌20年6月には、法華堂の仏像の疎開や解体の準備も始まって行くさなか、戦争は僧侶の心をも傷めました。

昭和20年の修二会は、灯火管制のため3時間繰り上げるよう指示がくだされました。3月14日、大阪大空襲があった日の下堂の時、大阪の空が真っ赤に染まる光景を見た、後に東大寺長老になられた筒井寛秀さんは、「大阪の空襲を終えたB29が、次々と奈良の上空を飛び去る音を聞きながら、食事もできず、空襲警報が解除されるまで、大阪の空ばかり見つめていたことが思い出されます。」と述べられています。

また、記憶に新しい平成23年3月11日。3年前の東日本大震災です。この日の惨事をニュースで知った後も、行法は続けられていました。

籠松明が上がる直前に、管長が自ら参拝者にむけ、メッセージとして3つの願いを述べられました。(次に掲載したものは、メッセージの前後を省略しています。)

私や東大寺と共に

- 1 被災され亡くなられた方々のご冥福を共に祈っていただきたい。
- 2 今、困難な状況におられる方々へ思いをはせ、共に苦しみを感しましょう。
- 3 被災者の支援・被災地復興のために、皆様がそれぞれのお立場で、各々が持つておられる力を尽くしていただきたい。

このメッセージに込められた思いこそ、1263回、1263年の重みをもつ願いであったと思うのです。

※1 密教的や神道的な修法を司る、四職(ししき)の一つ

■これからの時代を生き抜くために

私が皆さんに伝えたいことは、うわべだけを見て『知っている』というのではなく、奈良には本物があるのですから「本物の姿に迫ってほしい」ということです。このことを「深く知る」という言葉で伝えてきました。奈良の本物のよさを知り、子どもたちに伝えてください。

また、本物を見たり体験したりされた先生方からもその感動する気持ちを伝えていただく。そうすると、「肌で感じる奈良」が子どもたちの中に浸み込んでいくと思います。それが、奈良で学んだことを誇らしげに語れる子どもです。

誇らしげに語れるようになると、奈良で学んだ子どもたちのアイデンティティーが築かれていくことになるのです。これからどんな時代が来ようとも、どんな世界が変わっていこうとも、そのときに自分は何者かというものをもっていないと通用しません。だからこそ、今、自分が学んだところ、自分が育ったところ、自分が出会った人、自分がやり出したこと、そんなものが素晴らしいなということを、子どもに感じさせていたきたいのです。

今年、新規採用された教員をはじめ、全ての教職員の皆さんに、「奈良で学んだことを誇らしげに語れる子」の育成に取り組んでいただくよう、よろしくお願いいたします。



奈良市立小・中学校に着任した新規採用者